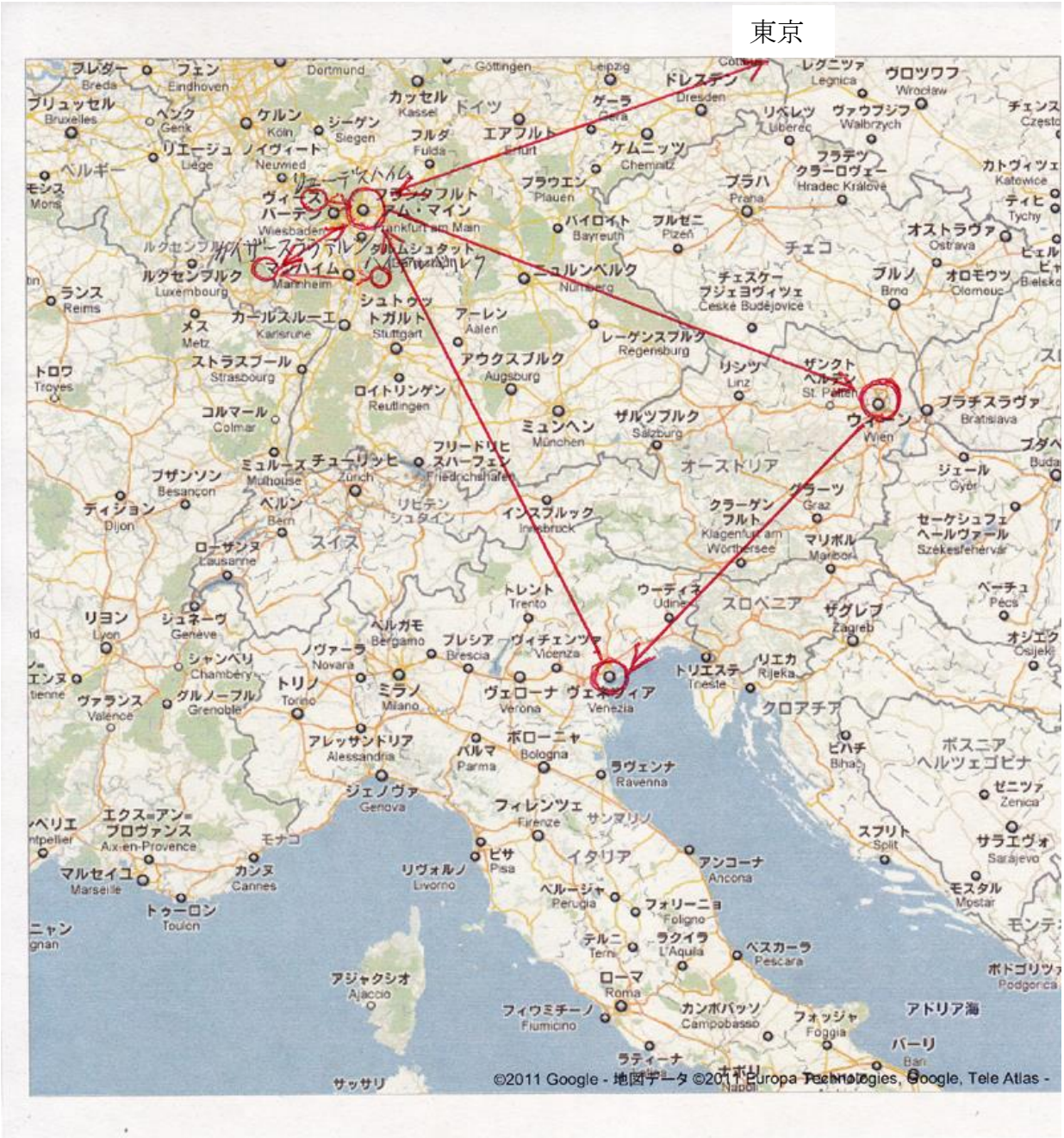
ドイツ・オーストリア・イタリアの旅

期　間

2011 年 9 月 8 日(木)～9 月 23 日(金)

訪問先とルート



★ドイツ：フランクフルト、リューデスハイム、カイザースラウテルン、ハイデルベルク
★オーストリア：ウィーン
★イタリア：ベネチア

【行程】

9月8日(木)　晴

娘と孫に見送られて、妻とタクシーで松江駅へ行く。サンドイッチを購入し、バスで米子空港へ行き、食事後に搭乗して羽田空港へ飛ぶ。そしてモノレールと京浜東北線を乗り継ぎ上野へ行記、京成の駅に荷物を預ける。

計画通り上野公園を観光する。まず「パンダそうめん」を食べた後、動物園へ入る。最初にパンダのお出迎え（写真）。たくさんの見物人でごったがえしている。前の列は親子のみ、その他は後ろの列で見る。昔父親を連れてパンダを見物し、係員に注意されたことを懐かしく思い出す。2頭とも太っていた。ライオン、虎、象、猿、カバ、キリン、鳥類など次々と現れる多数の動物を見飽きた頃に、不忍池にたどりつく。広大な蓮池を探索して弁天門から出た。

京成イブニングライナーに乗り、夕暮れの成田駅で降りる。メルキュールホテル成田にチェックインし、夕食は駅前の王将で中華を食べた。

9月9日(金)　曇

朝食は久しぶりに朝マック。ホテルのリムジンバスで成田空港第1ターミナルへ。あらかじめ送っておいた宅急便の荷物を受け取り、ANA カウンターでチェックインする。銀行でユーロに換金してから、ゲートを入る。出国審査を受けて中へ入るともう外国気分。1時間ほど免税店をブラブラしながら待って搭乗する。程なく和食の昼食が出てきた。あまり眠れなく、もっぱらビデオを観賞した。パイレーツオブカリビアン、米国で桜の花を咲かせた男など。

12時間のフライトで、フランクフルト空港には同日16時過ぎに着陸した。入国審査と荷物を受けて、フランクフルト中央駅行きの鉄道に乗ろうとする。ここでドイツでのキップの買い方がわからず、居合わせた人に教えてもらって自販機を操作する。約20分で着いたフランクフルト中央駅は、巨大なターミナル駅であった。ここから荷物を引いて道を試行錯誤しながらホテルまで約10分。メイン道路の路面電車は線路が工事中だった。

夕食はインド風の店でカレーにした。食事後に明日に備えて中央駅へ行き、電車の乗り方を調べておいた（つもりだった）。

9月10日(土)　曇後晴

ホテルの朝食はバイキングで種類も多くおいしかった。食事後に近くのマイン川まで散歩する。橋から中心街の高層ビル群が見えた。あれが有名な太陽パネルのビルかな？

荷物をまとめてホテルを出発し駅へ行く。まずリューデスハイムまでの切符を窓口で買おうとしたが、ここでは売らないとのことで自販機へ案内され、めんどうな購入操作をしてもらった(--);。次は列車に乗る階段が高く、荷物を持ち上げるのに苦労する。電車は中央駅を滑るように発車した。郊外に出るとドイツの田舎の風景が広がる。社内では次の駅名がドイツ語で放送され、電光掲示板に表示される。ヴィースバーデン

で進行方向が逆となり、右手斜面にブドウ畑が広がり出す。左手に大きなライン川が広がるとリューデスハイム駅だ。タクシーでホテル・リンデンウィルトを指名する。ライン川に添って走り、路地に入って5分で到着した。

チェックインには早すぎるため、フロントに荷物を預けてライン下りに出発する。まずチケットを20ユーロで購入し、船が来るまで約30分待つ。入ってきた船はかなり大きく、１階はレストランで2階はデッキ。デッキの屋根のある場所に座り、ビールを飲みながら見物する。朝のライン川は上空が雲に覆われて視界が今一だったが、時間とともに晴れてきた。丘には次々と古城が現れ、２人とも写真撮影に忙しい。ねずみの塔、ラインシュタイン城、シュターレック城、などなど（写真）。次々と大型船とすれ違うが、大半は輸送船でこの川が物流の大動脈であることを実感する。途中でいくつかの船着き場で乗客が乗降した。ハイネの誌に歌われたローレライでは、その謂れのアナウンスがありローレライの音楽が流れた。昔はここで頻繁に船が難破し、魔女伝説が生まれたそうだ。

ザンクト・ゴアールに到着し下船する。人気の観光スポットらしく、たくさんの観光客で賑わっている。昼食はパスタとピザ。赤い登山バスに乗りお城へ登る。展望台への登りは急階段だったが、そこからのライン川の眺めは抜群だった。お城には営業中のホテルもあり、人気だそうだ。帰りは眺めを楽しみながらゆっくりと歩いて山を下る。登ってくる赤いバスの観光客に、手を振ったら同じく返された。共通のコミュニケーション！

再び船に乗り、今度は“ライン上り”を楽しむ。行きかう大小様々な船を見ると、右側通行で追い越しは左側、のルールが守られていることがわかった。登りは下りの１時間半の倍かかると思ったが、２時間余りでリューデスハイムに到着した。

ホテルに戻り改めてチェックイン。部屋は広くはないが眺めが良かった。花や木に覆われて美しいホテルだ。夕食は繁華街の「つぐみ横丁」（なぜつぐみなのか？）でバンドの演奏を聴きながらいただく。乗りのりの西洋人の客たちはバンドの前で踊っていた。地元の奥様方によるカウベルの演奏もあった。

9月11日(日)　晴後雨

朝食後、ライン川の畔を散歩する。昼間の賑やかさとは打って変わって静かで、そして清らかに感じた。散歩中の白人老夫婦に頼んで川をバックにシャッターを押してもらう。市役所のある町の広場も静かで、教会と対峙して大きな葉を付けたりっぱな大木があった。地面はみごとな石畳、歩いて気持ち良い。つぐみ横丁を登ったところに宮殿風のりっぱな建物があった。ロープウェイ駅は清掃中だった。

ホテルへ帰り、荷物をまとめてチェックアウトする。荷物をホテルに預けて朝見たロープウェイの駅へ。高度を上げるにつれて一面にブドウ畑が広がる。加えてライン川とその流域のすばらしい眺め（写真）。

展望台は観光客で賑わうが、ここを過ぎると急に人が少なくなる。静かな森の散策路だ。地元らしき夫婦連れと前後し時々、ダブルストックを持った集団や、犬と散歩

する夫婦と出会う。森は下草がなく遠くまで見通せるし、歩くこともできる。木の実がたくさん落ちている。看板によるとリスを始めいろいろな動物が生息しているらしい。緑豊かな広葉樹で、秋が深まると紅葉がきれいなことだろう。約1時間半にわたり、森を散策して再びロープウェイで下る。路上レストランで昼食をとってからホテルへ戻る。

これからいよいよ KES 国際会議会場のあるカイザースラウテルンへ向けて移動する。ドイツ鉄道を乗り継いで、間違いなく目的地へたどりつかねばならない。ところがリューデスハイムの駅でトラブル。来るはずの列車が来ない。乗り換えのフランクフルト中央駅で 50 分程度の余裕はあるが、それで間に合うか。待つこと 25 分、やっと列車が来た。中央駅での乗り換えは TGV だからさぞりっぱな列車かと思ったら、個室ではあるがかなり古い車両だった。マンハイムまでは一面に平野だったが、ここからは山の中に入っていく。空には暗雲が立ち込め、雷も鳴りだした。

到着したカイザースラウテルンの町は雨。タクシーでアルカトラズ・ホテルへ入る。案内された部屋は 2 段ベッドで部屋の中にトイレがあり、シャワーは外の共同、まるで独房だ(--);。ロビーでネットをしていた日本人の男性（寿司屋を開業するために大学でドイツ語の勉強中とのこと）に聞くと、ここはもと刑務所だったとのこと。そういえばジョークなのかフロントも鉄格子の中だ。あの部屋ではたまらん！と思い、フロントに頼んでダブルの部屋に変えてもらった。今度はトイレ、シャワーも普通にあり、ここなら OK だ。やれやれ(--);。

18 時までの KES レジストレーションに間に合うよう、雨の中を歩いてサックス・ホテルに向かう。受付ではチェアマンであるボーンマウス大学（イギリス）のハウレット教授の握手を受ける。

夕食は来る途中で見つけた寿司屋で寿司とビール。とは言ってもこの店は中華料理が専門で、寿司はかなりあやしいものだった。

9 月 12 日(月)　晴

いよいよ今日から KES2011 が始まる。朝食を済ませてすぐに出発する。今日は天気が良く、大学まで歩くのが良さそうだ。KES 提供の地図を頼りに約 40 分歩くと、駅をすぎて鉄道のガードを潜る。ここから大学へ登り道となり、これが思ったより長い。まだかまだかと汗をかいて登ると、やっとカイザースラウテルン大学の正門だ。ここからキャンパスに入るが、校舎が多く広大で、国際会議の会場がなかなか見つか

らない。結局ホテルからだと 1 時間 20 分もかけてやっとたどりついた（写真）。ここで今回初めて、湘南工科大学の吉田先生夫妻と再会する。記念講演の後、和歌山大学の宗森先生、静岡大学の市川先生を始め顔なじみの先生方と出会う。昼食は大学の学食でチケットのチェックがあり、肉・野菜入りヌードルを食べた。

午後は会議を適当に切り上げて、バスで帰る方法を試みる。初めてなのでバス停の方向に手間取った。一人 1.8 ユーロだった。この町に詳しい市川先生と一緒になり、降りる停留所を教えてもらった。

ホテルへ戻り荷物を置いて、電車の時刻を調べにカイザースラウテルン駅へ二人で行くことにする。この町は人口 10 万と言われるが、中心街は賑やかでりっぱな建物も多く、またきれいである。治安の問題もなく、安心して歩ける。帰りは行きと違う道を歩いたらホテルへ戻る道を失い、通りかかった若いカップルに聞いてみる。すると説明するより自分たちで案内する、と 2 人で導いてくれた。ドイツ人の親切心には驚いた。

夕食は再び昨日の中華の店で中華料理（困った時の中華料理だ）。明日はいよいよ発表日なので、スライドの整理とチェックを行った。

9 月 13 日(火)　晴時々曇

今日はバスターミナルから路線バスでわずか 20 分、昨日調べた成果でスムーズに会場へ着いた。午前中は、私も連名者である吉田先生の発表を聞く。発表の合間にパソコンを Wi-Fi でつなぎ、日本からのメールをチェック。発表会場の校舎では、学生たちが 3~4 人のグループになり、熱心にディスカッションしながら勉強をしていた。レポートの課題を与えられていたのだと思う。昼食後、妻とキャンパス内を散歩する。校舎が 30 以上分かれてあり、工科大学としては東工大並みに大きい。キャンパス内には市のシンボル(?)の魚が置いてあった。

午後はいよいよ私の発表だ。発表は練習通りでスムーズに進んだ（写真）。質問は九州工業大学の三浦先生、和歌山大学の吉野先生、静岡大学の市川先生から 3 件あり、いずれも的確に答えることができたと思う。ばんざい！

セッション終了後、参加者全員が用意されたバスで中心街の市民ホールへ行く。バンケットの開始は 1 時間後だったため、我々は一旦近くにあるホテルへ帰る。バンケットは 19:30 開始で、私達は吉田夫妻の隣に座った。向かいは宗森先生、市川先生で、ドイツの情報を交換しあう。大ホールで総勢 300 人は出席していたと思う。ドイツ料理は肉、ジャガイモが主体で、ビールは安くてうまい。女子学生らしきメイド軍団が整然と料理を運ぶ姿が絵になった。最後に表彰式があり、ハウレット先生から表彰者の紹介があった。座長の宗森先生も紹介された。閉会は 22 時頃だった。

9 月 14 日(水)　晴

発表が無事終わったので、今日は 1 日フリーの日とする。さあ、憧れのハイデルベルクへ行こう。カイザースラウテルン駅まで歩き、目的の列車を調べる。そのうちに停車中のマンハイム行きは出てしまい、次の列車まで 50 分待つことになった。幸い列車

はハイデルベルクへの直行便で、約 1 時間で着いくことができた。ハイデルベルク・メイン駅から路面電車に乗りビスマルク広場へ。ここで路面電車の切符は乗車前に購入することを始めて知った。

中心街のハウプト通りは観光客でにぎわっていた。大学広場入口に学生牢があり、大学図書館は工事中のようであった。マルクス広場へ着くと、ここから初めて大きなハイデルベルク城が見えてくる。広場にはたくさんの人が集まり賑やかだ。ここで昼食、ポテトでビールを飲む。

ケーブルカーに乗り、いよいよハイデルベルク城に入る。ネッカー川に添って建つハイデルベルクの街並みが美しい。川の対岸には昔ゲーテの歩いた「哲学者の道」が延びている。あとであそこを歩こう。チケットを購入し城内へ入ると石畳の広場がある。城内にあるワインの大樽が印象的だった。城壁から眺めるハイデルベルクの街並みはみごと。ゲーテ、ショパン、シューマンらが愛した街、大学からは 13 人のノーベル賞受賞者が出た伝統の町である。

再びケーブルカーでマルクス広場へ下り、ネッカー川にかかるカール・テオドール橋を渡る。お城を背景にたくさんの観光客が写真を撮り合っているので我々もそうする。橋を渡り哲学者の道の登りにかかる。石畳の急坂に汗をかいて約 15 分、中腹のゆるやかな道にたどりつく。ドイツの老人会らしき団体が、途中何度も休みながら励まし合って急坂を登っていた。そしていよいよ“哲学者の道”をハイデルベルクの街とお城を見下ろしながら歩く（写真）。思索に耽ける事を試みるが、なかなかゲーテの心境にはなれそうにない。見下ろすハイデルベルクはまさに世界遺産の風景だ。道端には見慣れない美しい花がたくさん咲いていた。

テオドール・ホイス橋を渡ると再びビスマルク広場に至る。ハウプト通りのカウフホッフ・デパートに入って買い物。ケータイの縫いぐるみとロビンの縫いぐるみを購入した。

帰りはちゃんと切符を購入して路面電車に乗り、ハイデルベルク・メイン駅へ。自販機での切符購入にも慣れ、16 時過ぎの予定通りの電車に乗ってカイザースラウテルンへ戻った。

この日の夕食は中心街でドイツ料理の店。誤って妻のバッグにビールをかけられるハプニングがあった。

9 月 15 日(木)　晴

4 泊した元刑務所の ALCATRAZ ホテルも今日がチェックアウトの日。荷物をまとめてフロントに預けると、隣

にある日本庭園へ行く時間ができた。ドイツ語でヤパニッシェ・ガルテンは概ね日本庭園であるが、赤い鳥居を入ると仏様が置いてあり違和感を覚えるところもあった。枯山水の庭の背景に刑務所ホテルがあり、その配置を面白く感じた。キャラボクらしき赤い実が食べるとおいしく、その名所の大山を思い出した。

ホテルに戻ってタクシーを手配し駅へ向かう。運転手は英語の“ステーション”ではわからず、ドイツ語の“ハウプトバーンホフ”で通じた。マンハイムでフランクフルト行きに乗り換える。ところがホームへの階段は工事中のエスカレータが使えず、私が荷物を引っぱり上げている間に、通った男性が妻の重い荷物を引っぱりあげてくれた。3 日前の道案内と言い、ドイツ人は親切であることを実感した。

フランクフルト空港駅で降りて、まずチェックインする。行き先のオーストリアは EU 加盟国なので、国内扱いで出入国手続きはなし。それにしても、このフランクフルト空港はヨーロッパ最大のハブ空港でとにかく広い。9 年前にザルツブルグからこの空港で成田行きに乗り換えようとした時、ザルツブルグからは一番端の国内線ターミナルに到着し、国際線のターミナルまで延々400m、出発に間に合うため重い荷物を持って汗ダラダラで走り回ったことを思い出す。苦い思い出だ。

ウィーンには 18 時前に着いた。空港のシャトルバスに乗り、ドナウ運河沿いに夕暮れのウィーン市街へ入り、バスターミナルのシュヴェーデンプラッツに着く。ここでタクシーに乗り換えてホテル・コンツエルトハウスに着いた。広くりっぱな部屋に落ち着いた後、夕食に出かける。噴水の公園の通りに中華料理の店を見つけてビール付きで夕食を摂る。困った時には世界中どこにもある中華だ。

9 月 16 日(金)　晴

ホテル・コンツエルトハウスの朝食はおいしい。昨年のイギリスや一昨年のイタリアのホテルよりうまい。

ウィーンと言えば、まずはシェーンブルン宮殿だ。路面電車に乗って行こうとしたら、キップ売り場がない。乗り場近くのタバコ屋に聞くと、「ここでは売ってないのでここから 10 分歩いたところに買いに行け」という。迷いながらやっとキオスクのような建物を見つけ、48 時間フリー券を手に入れた。ところが乗った電車は行き先違いだったので、途中で降りて妻に促されやむなくタクシーに乗る。30 分で 23 ユーロかかったと思う。

そして待望のシェーンブルン宮殿の表玄関へ着くと、その広場はたくさんの観光客だ。チケットはオーディオガイド付きで 13 ユーロだった。荷物を預けさせられ、宮殿内を見学する。鏡の間が印象的で、大ギャラリーは豪華絢爛、漆の間は個性的だった。ショップで手間取り、一旦表玄関へ出て庭園に入り直す。

シェーンブルンの庭園は広大だ。ネプチュ

ーンの泉までで半分、ここから丘にそびえる記念碑グロリエッテまでの登りが急でちょっとしたハイキングとなる。ここでビール付きの昼食とする。展望台にはお金を払って登るが、それだけの価値はある。ここから見下ろすシェーブルンの全貌（写真）は筆舌に尽くしがたい。女帝マリア・テレジアの強大な権力によって作り出された、華麗なる世界文化遺産である。以前に見学したパリのベルサイユ宮殿と甲乙つけがたい感があった。庭園の周りには森が広がり、リスが遊んでいた。妻が地元の人に餌をもらい、餌でさそうと食べに来た。

次の見学先は期待の大きい美術史博物館。フリー券を使って電車に乗って市街に戻り、カールブラッツで下車してオペラ座へ向かう。ウィーンのシンボルであるオペラ座の周辺は人でいっぱいだ。スワロフスキーを見つけ、娘のお土産のネックレスを購入する。ここから西へ 10 分歩くとゲーテ像があり美術史博物館が見えてくる。チケットは音声ガイド付きで 12 ユーロ、うれしいことに写真は撮り放題だった。印象に残ったのはプリューゲルの「雪中の狩人」と「バベルの塔」、ベラスケス「青いドレスのマルガリータ」。そしてハイライトはフェルメール「絵画芸術」、これはここでしか見ることはできない。満足度 100 パーセントの美術館だった。

路面電車に乗り 2 番目の駅で降りる。予定と別方向へ進んだため慌てて降り、広場を歩くと右側に大学がある。どうもこれがウィーン工科大学らしい。ということは通りの向かいに目的の楽友協会があるはずだ。そしてあった、あこがれの楽友協会の金色の建物が！チケット売り場を探し、ものは試しと今夜のチケットがないか聞いてみる。すると「モーツアルトのコンサートのチケットがある」という。ただし正装が必要との条件で、喜び勇んで 54 ユーロで 2 枚購入した！日本だったらプレミア付きで 1 万円以上するであろう。

そうなると、帰って身支度しなければならない。私は学会発表用のスーツにネクタイをし、妻は国際会議ディナー用の服を着てこれで OK。例の中華で夕食を済ませ、会場には 50 分前に着く。既に正装した多数の観客が集まっていた。そしてニューイヤーコンサートで毎年見ている、あのコンサート会場へ入る。席はやや後方ではあるが正面席でよく見え音もよさそうだ。このコンサートホールは、音響効果の良さで世界的に定評がある。

ホールは側席、2 階席も含めてほぼ満杯となり、20:15 にいよいよ開演した。指揮者も演奏者も皆かつらをかぶり、裾の長い服を着て正にモーツアルトの世界だ。アイネクライネナハトムジーク、交響曲 40 番など馴染みのモーツアルトに加え、フィガロの結婚などソプラノ、テノールによるオペラも入った（写真）。そして最後はシュトラウスの美しく青いドナウ、ラディッキー行進曲とニューイヤーコサートそのものになった。手拍子も加わり観客は大喜び、私達も大満足の時間だった。

9 月 17 日(土)　晴後曇

今日はウィーン滞在の最終日。チェックアウトを済ませて荷物を預け、路面電車に乗る。降りた所が王宮の庭園への入口で、豪華な王宮が目の前に広がり、観光用の馬

車が行き来する。10ユーロで切符を購入し、中へ入るとまず銀器コレクションの展示が続き、眩いばかりだ。ハプスブルク家の所有していた膨大な数の食器類だ。ここは撮影OKだったが、次のシシィ博物館はNGだった。それにしても王妃エリザベートは気品があり美しい。しかしその人生は暗かったようだ。プロポーションを保つための運動器具が面白かった。記念にエリザベートの英語ガイドブックを買った。

展示室を出て中庭に回ると、何やらにぎやかだ。地元の敬老会による吹奏楽団の演奏会のようである。大きな人だかりで、フランツ2世像の上に登って見ている少年たちもいる。私たちも集団に入りしばし観賞する（写真）。演奏レベルは今一であったが空は青空、王宮とたくさんの観衆に囲まれて雰囲気はすばらしかった。

王宮を離れて次のシュテファン寺院に向かおう、としたところでうちの迷子さんのトラブル。この教会はウィーンの象徴として137mの天を突く塔を持つ。中は暗く厳かな雰囲気だった。エレベータで塔へ登ってみたかったが、礼拝中で本日は解放できないとのこと。

ウィーンの銀座通りであるケルトナー通りを歩く。歩行者天国に両側はお店が並び、通りは観光客で溢れている。ここで昼食を食べる。通りでは宙に浮くショーも行われていた。繁華街はオペラ座まで500mに渡って続いていた。再び楽友協会の前を歩きホテルに戻る。

これでウィーンの観光も終了、荷物を受けとってタクシーを拾う。運転手に「リムジンバスに乗るからシュヴェーデンプラッツまで」と言ったら、「直接空港まで30ユーロで良い」とのこと。ガイドブックではタクシーで60ユーロとあるが、30ユーロだとタクシー＋バスの費用とトントンだ。これはしめたと交渉成立する。話好きの運ちゃんと英語で会話する。大幅に時間も短縮され、ウィーン空港では余裕だと思った。しかしチェックインで重量オーバーとなり、その場で5キロをリュックに移すはめに。今度はリュックに移した荷物に化粧品があり、ゲートで引っかかって没収されてしまった。妻のなげくこと。（エコノミーは23kgで2個まで）

1時間でベネチアのマルコポーロ空港に着いた。ここからは船に乗るが、この切符を買うのに長い行列。船の乗り場まで長い距離で、出発に間に合うために汗をかいた。船は乗客で満席、なんとか座れたがしばらく汗が止まらない。1時間半の船旅は途中で夕暮れとなり、景色もほとんど見られない。

サンマルコのザッカリアに着くと、とたんに明るく賑やかとなる。ホテルまで5分とあるがうまく見つからない。店員に聞いて橋をひとつ渡った所に目的のホテルが見つかった。チェックインし部屋に入ると、狭いツインの部屋。これで4泊はつらいのでもう少し広い部屋への変更を交渉し、明日から変えてもらうことになった。落ち着いたところで外出し、夕食はまたもや中華。食事の後、あの有名なサンマルコ広場へ行く。夜10時を過ぎているのに人の群れが続き、むちゃくちゃ賑やかだ！バンドの演奏も複数個所で華やか。これがベネチアかと実感した。

9月18日(日)　曇

今日は日曜日、1日中観光の日とする。まずは昨夜のサンマルコ広場へ出かける。既に多数の観光客で広場は埋まっている。最初にドゥカーレ宮殿に入るが、ここは撮影NG。バテレン系の豪華な絵が次々と現れる。元老院の間と大評議の間が特に大きく豪華だった。地図の間も興味深い。1階へ降りると華やかさから一転して昔の牢獄だ。ここへ入る途中で運河を渡る。そこが有名な「溜息の橋」だ。囚人はこの橋を渡る時に、この世に別れを告げて溜息をつくとのこと。暗い気持ちで外に出ると、中庭にブロンズ製の井戸がある。近くの白人に頼んでツーショットで撮ってもらう。

次は私の大好きな高い所である「鐘楼」へ行く。エレベータで97m上がると、そこはベネチアの街が一望できる展望台だ。まずは赤色の建物で統一された街の美しさに驚嘆する。次は水と街のすばらしいコントラストに感動する。海につながるサンマルコ運河から大運河（CANAL GRANDE）へ続き、無数の運河が街を作り、大小様々な船が行きかう。海にはたくさんの島々が点在する。教会らしき建物が街のあちこちに見渡せ、真下には大きなサンマルコ寺院とドウカーレ宮殿そしてサンマルコ広場(写真)だ。これがベネチアか、と改めて実感し心を打たれた。

昼食は豪快なサンドイッチとペットボトルの紅茶とする。一旦ホテルに戻り部屋替えをする。今度はダブルでゆったりした良い部屋だった。少し休憩してアカデミア美術館へ向けて出発する。ベネチアの道は入り組んでいるが、メインの通りはたくさんの人が歩くので、逆らわなければ間違いなく歩けることがわかった。初めて木造のアカデミア橋を渡る。橋からの景気は最高だ。大運河沿いに美しい建物が並び、たくさんの船が行きかう。アカデミア美術館はこの橋の畔にある。かなりの数の絵画であるが、印象的だったのはベッリーニ作「サン・マルコ広場の祝祭行列」、デルドビッチ作「サン・ロレンツオ橋から運河に落ちた聖遺物の奇跡」、サン・ロレンツオ橋はリアルト橋とは違うらしいがどこだろう？絵の中では妻の言う通り、金の棒が神を表わしているらしい。

ここから、今日のIWINレセプションの集合場所となっているレストランを目指して歩く。目的のリストランテ・オニガは広場にあったが、時間が早いためIWIN参加者はまだ誰もいない。引き続き明日のIWIN2011の発表会場である Ca’ Foscari を探して、さらに進む。大学らしき建物の先に運河があり、校門は橋の手前にあった。今日は日曜日のた

めか、校舎は閉まっていた。看板で確かにここが目的のベネチア大学であることを確認する。

集合場所で岩手県立大学教授の村山先生やシステム・フロンティアの松平さんに出会い、時間つぶしで一緒にお茶をする。しばらくして静岡大学の木谷先生から「移動します」との案内で、レセプション会場のフラローラへ。ここで今回初めて、IWIN のチェアマンである愛知工科大学の水野先生ご夫妻と再会する。吉田先生夫妻、市川先生も一緒だ。レセプションでは鈴木先生夫妻、神奈川工科大学の速水先生と一緒のテーブル。イタリア料理を味わいながら、いろいろな話を聞いた。速水先生にはデータベースの教科書を私の授業用に売り込まれて困った。鈴木夫妻は世界中を旅行しているらしく、海外旅行のベテランだ。それでも、我々のネパール新婚旅行の紹介は大受けであった。そこまでやった人はここにいなかったから。吉田夫妻と話すと、今回のケルン旅行は楽しかったようである。解散は 22 時過ぎだったと思う。アカデミア橋を渡りサンマルコ広場に戻ると、まだまだ沢山の人で賑やかだった。

9 月 19 日(月)　曇後雨

今日は IWIN2011 のレジストレーションの日。ホテルの朝食は 7 時半からで、食事後にすぐ出発する。早朝にもかかわらず、街はすでに観光客だらけ。朝のアカデミア橋のながめはすがすがしい。ブルーの大運河に大小の船が行きかう。ベネチア大学には、昨日とは打って変わってたくさんの学生が出入りし、賑やかだ。2 階の講義室が会場だった。ここのベランダからの眺めはすばらしい(写真)。大運河が目の前で、右側はアカデミア橋、左側はリアルト橋と絶好のポイントだ。たくさんの船が行きかい、飽きることがない。ライン川のように右側通行は徹底されず、大小の船が交錯し衝突しないか心配になる。聞くと船のパトカー、救急車もあるそうだ。

会議は開催校のベネチア大学の挨拶で始まった。そしてジェネラルチェアーの村山先生の挨拶の後、第 1 セッションを開始。この日の参加者は 50 名程度であった。昼食は大学内での立食で、妻も特別に入れてもらった。肉、魚、野菜のバイキングで、ワインもいただく。デザートはケーキで、これをエスプレッソでキュッといただく。

私の発表は明日のため、今日の会議はこれで切り上げ会場を後にする。帰りはリアルト橋を渡る。ベネチア最古の橋で、風格の石作りである。昔たくさんの人が通行して落ちたことがあり、頑丈な大理石に変えたそうだ。通路は左右に分かれ、中央は土産物屋になっている。たくさんの観光客でごったがえしていた。通行人に頼んでツーショットの写真を撮る。

ここからサンマルコ広場までは近い。サンマルコ寺院へ入場しようとすると、すごい列だ。おまけに訳のわからぬ場所まで行ってリュックを預けろと言う。30 分かけて

やっと中に入り 2 階のテラスに上がろうとするが、登り口が見当たらない。有料のゲートがあり入ったら、それが祭壇だった。

疲れた体でホテルへ戻り、明日の発表に備えてスライドの整理をする。パソコンをホテルの無線 LAN につなぎ、日本のメールのチェックもした。

夕方は IWIN のバンケットがあるので、再びホテルを出て大学へと向かう。多数の人が集まり、初めて顔を合わせる人もいる。バンケットは大学のリアルト橋方向にあるレストランのフラットリア・デ・イグナシオで行われた。私たちは中庭の席に座った。ところが雲行きがあやしく雷も鳴り、すると雨を防ぐための屋根が出てきた。ここでは岩手県立大学の澤本先生夫妻と仲良く話をして飲んだ。イタリア料理のコースはさすがにおいしかった。水野先生夫妻、吉田先生夫妻、市川先生らと共に歩いて帰り、バンド演奏でに賑やかなサンマルコ広場で 11 時前に解散した。ここは不夜城か？

9 月 20 日(火)　晴後曇

本日は発表日であるが午後の遅い時間のセッションのため、午前中は市内見物をする。ガイドブックで調べると、サンマルコとは裏手に当たるところにパオロ教会がある。穴場的なところなので行くことにする。その前に明日の帰りの船の下見。サンマルコ広場を海に向かい、切符の売り場を確認する。朝にもかかわらず沢山の観光客が行き来している。地図を片手に入り組んだ道をいくつかの運河を渡り、目的のパオロ教会にたどりついた。広場にはまだ人はまばらだった。2 ユーロ払って入場する。中は広大で多数の絵画、天井絵、ステンドグラス、そしていくつにも分かれた祭壇があり、じっくりと見て回る。人が少ないことがより荘厳さをかもしだす。喧騒なサンマルコ寺院よりずっと良いと思った。教会の隣の建物は船の駅のようで乗客が集まり、船着き場があった。

地図ではホテル・ブリッジはここから近い。地図と感で裏道を歩いていると、方向がわからなくなってしまった。焦ってどんどん歩くと前に見たような運河であるが、全く見知らぬ建物がある。地元らしき男性に地図を見せて聞くと、サンマルコは方向違いとのこと。指示に従いしばらく進むと海岸へ出た。やれやれ見慣れたザッカリアだ。冷や汗の体験だった。こういう時は山の磁石があると方向がわかって良い、と思った。

ホテルで身支度をし、いよいよ自分の発表へ向けて出発する。奥様方は観光に行ったようで、今日の昼食はさすがに妻には遠慮して外で食べてもらった。午後のセッションでは、予定外で大学責任者からのスピーチがあり、全体が後へずれた。私の発表は 15 時 30 分くらいからであったと思う。発表は練習通りスムーズで、質疑応答では NTT ドコモの土井さん、東北大学の高橋先生、静岡大学の市川先生からの質問に問題なく答えることができた(写真)。後の発表者の中には質問に答えられない大学院生もおり、指導の先生がフォローしていた。

すべてのセッションが終了すると、参加者は中庭に集まり今日の夕食の会場へ移る。この日

の会食では、再び鈴木夫妻と同席だった。私の隣は岩手県立大の藤原先生だった。コース外でとびきり良い赤ワインを飲める機会もあった。我々はこれがベネチアで最後の夕食ということになる。

9月21日(水)　晴

今日は帰国の途に着く日だ。朝のインターネット新聞で日本に台風15号の記事があった。予想進路を見ると関東直撃だ。成田にはちゃんと着陸できるか心配になった。しかし今日東京を通過となると、明日の午後なら大丈夫そうで安心する。

このホテルでの最後の朝食を、いつもの子供連れ夫婦と一緒に賑やかに食べる。ホテルの外へ出ると夜の雨もやんだようだ。重量オーバーでまた引っかからないよう、慎重に荷物をまとめる。9時前にチェックアウトし、4泊したこのホテルと別れた。昨日下調べをした波止場へ行き、空港までのチケットを買う。ところが、空港行きの便が電光表示板に出てこない。皆ムラーノ島止まりだ。ひょっとして乗り場が違うかも、と焦って別の乗り場を探したりでバタバタする。結局空港行きはこの波止場で、電光掲示板にはない隣の乗り場であることがわかった。出発直前に係員から「Airport!」の掛け声があり、飛び乗って冷や汗もの、これも個人旅行のスリルだ。

来た時の船便は夜で暗かったが、帰りのこの便は外が明るく天気も絶好、ベネチアの海の美しさを実感した。まず本島より大きいリド島に寄り、島を裏に回ると昨日行ったパオロ教会が見えた。ムラーノ島は一大観光地のようで、たくさんの人が降りて行った。その後はマルコポーロ空港まで一気に加速して走る。航路には両側に杭が立てられ、暗くても迷わないようにしてあった。

空港へは出発3時間前に着いた。ところがルフトハンザのチェックイン機5台には猛烈な列ができており、早めに着いておいて良かったと思った。ベネチアにはこれだけの観光客が世界中から来ていたのだ、と改めて驚いた。重量オーバーなしで成田までの荷物を無事預けると、急に身軽になった気がした。ゲートを入り出国審査を受けて中へ入ると、そこはEU圏の外であり気楽になる。まずはパン、ソーセージとビールで昼食し、イタリアのお土産をいくつか買っておいた。

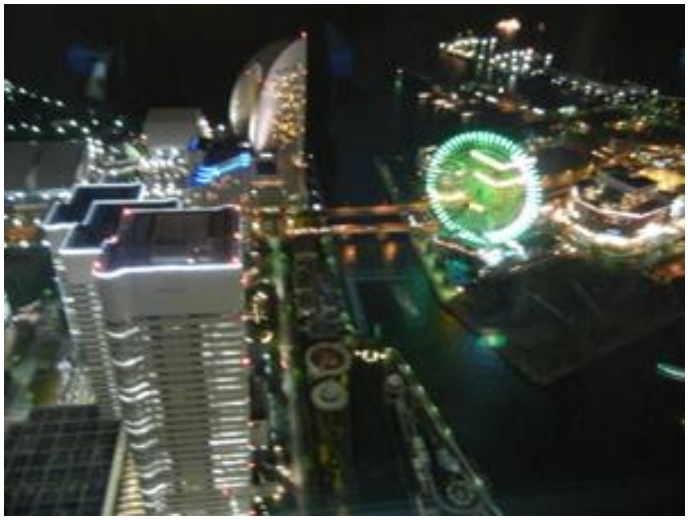
1時間半のフライトで再びフランクフルト空港へ戻る。ここでは乗換のみだが、出発に5時間もあるのでゆっくりする。まずは知人へのお土産の購入で免税店を歩きまわる。ここで手持ちのユーロを使い果たしたので、残りはカードで買う。ANAの搭乗口は日本人だらけだった。ジャンボ機に乗り込み、21時前に帰国の途についた。

9月22日(木)　曇

離陸後しばらくして夕食が出る。時計を再び7時間進める。食事後少し寝て、その後はもっぱらビデオを楽しんだ。穂高岳登山をモデルとした「岳」を再び見た。飛行機は定刻通り15時に成田空港に無事着陸した。税関はノーチェック、ここで正式に帰国となる。荷物を再パックし宅急便で預け、空港の外に出る。曇ってはいたが雨はなく風も弱かった。日本もすっかり涼しくなっている。

横浜シティエアターミナル行きの切符を買い、ガラガラのバスに乗り込む。都内が渋滞とのことで、木更津から東京アクアラインに入った。これは一度通りたかったルートでうれしい。周りは一面に海、東京湾のどまん中だ。台風の余波か海は荒れ気味、風でバスが揺れる。しばらく走ると海ホタル、ここからは海底トンネルに入る。トンネルを出ると川崎浮島で、湾岸沿いに生麦からネオンの輝く横浜へ入る。

息子と落ち合うまで1時間半あるので、私の好きな高所のランドマークタワーへ行くことにする。荷物を預け、初めて“みなとみらい線”に乗ってみる。降りるとランドマークタワーが見えるはずであるが、高いビルばかりでどっちだかわからない。こんな高層ビル街はヨーロッパにはなかったので、まるで異次元の世界だ。一回りしてやっと正面に見えるビルがランドマークとわかった。エレベータで277mを一気に上がるとそこは別世界、広大な夜景の美しいこと。特に大観覧車からインターコンチネンタルホテルにかけてのみなとみらいが美しい(写真)。ひときわ明るい横浜スタジアムはナイター中だ。息子の会社の独特な楕円筒形ビルもすぐ下にある。東京方面には東京タワー、房総半島には幕張も見える。



再びみなとみらい線で横浜駅に戻ったが、行きと帰りで改札口が違ったためコインロッカーを探すのに手間取る。西口の交番前で息子と合流し、夕食に行く。天ぷらに刺身、漬物、味噌汁、ご飯で久しぶりに日本食を味わって食べた。

9月23日(金)　晴後曇

今日は16日間の旅の最後、いよいよ故郷の松江へ帰る。羽田の前にお台場へ行くことになり、親子3人で出発する。東海道線で新橋へ行き、親子連れで賑わうゆりかもめに乗った。久しぶりにレインボーブリッジを渡る。駅からそのまま巨大ボールのフジテレビへ。見学コースでは、思い思いの番組で記念写真を撮る。私は「とくダネ！」をよく見るのでその前で妻と一緒にパチリ。SMAP &SMAPはあまり見るわけではないがここでもパチリ。お台場天国では、メキシコがテーマのお店とイベントだった。お店のメキシコ人に、20年前フェニックスに行った時メキシコ料理でメキシコ音楽を聞いた話をしても、商売でテキーラの購入ばかり勧められ、波長が合わなかったのは残念。

息子が羽田行きのバスを見つけてくれたので、息子と別れそれに乗る。羽田へは高速を走りわずか30分で着き、お陰で時間の余裕ができた。ゲートを入って昼食に500円のソバを食べるが、久しぶりの味なのでうまい。飛行機は初冠雪で白くなった富士山の上空を飛んだ(写真)。来年はキリマンジャロの訓練でここへ登る予定だ。米子からバスで松江駅へ、そしてタクシーに乗り16日ぶりに自宅に到着。久しぶりに会う娘と孫の歓迎を受け、今回の旅を終えた。

【雑感】

１．日常生活

訪問地の 9 月の気温は 10～25 度で快適だった。フランクフルトやウィーンは寒かろうと思い、セーターまで持って行ったが、全く使う機会はなかった。日本の 11 月くらいに当たるかもしれない。ベネチアは少し温かく、日本の 10 月くらいか。

治安は極めてよく、外を歩いて何の心配もいらなかった。特にドイツはキチンとしていて町もきれい、親切で困った時は助けてもらえた。ウィーンも治安は全く問題なし。ベネチアは同じイタリアのローマでの苦い体験で心配したが、スリなどの心配は全くなかった。ベネチアには世界中からこれだけの観光客が訪れるので、取り締まりに国の威信をかけているのであろうか。（それにしてもローマはいいかげんだ）

急激な円高で 1 ユーロ 105 円程度（昨年は 120 円）と今までになく円の価値は高かった。日本国内では困る人が多いが、海外旅行者にはありがたい。ビールは安くてかつうまい。ウィーフィルのコンサートが 54 ユーロとは信じ難く安いと思った。

朝食はパン（必ずクロワッサンがある）、各種ハム、ベーコン、ソーセージ、卵、ヨーグルト、果物など。飲み物はコーヒー、紅茶、各種ジュース、牛乳など。西洋ナシがやけに美味く気に入った。

日本のようなコンビニは全くなく、スーパーマーケットは所々にあった。自動販売機もほとんどない。

鉄道は主要駅以外の駅は無人のためキップ売り場の窓口はなく自販機で買う。日本のように駅に改札はなく、そのまま乗車する。たまに車掌がチェックにくるが、信用しているのかそのままの場合が多く、いいかげんである。彼らは日本の改札の厳格さにはビックリすることだろう。

ホテルではテレビを良く見たが、日本の話題はほとんどない。さすがに津波の被害者の話と福島第 1 原発のニュースは何度かあった。野田新総理の姿もあった。英語では CNN と NHK ワールド（ベネチア）が見られた。ドイツ語とイタリア語の放送が 30 チャンネル以上もあり、これは聞いてもわからない。

電子機器、特にビデオカメラ、デジカメは日本企業（ニコン、キャノン、富士フィルム、ソニーなど）が独占していた。テレビ、冷蔵庫など家電製品はフィリップス、シーメンスが強そうだった。携帯電話は日本製は弱い。

車は圧倒的にヨーロッパ製でベンツ、フォルクスワーゲン、BMW、ルノー、フィアット、アウディーなど。時々フォードと日本のトヨタ、日産、マツダだった。

町の中心街には必ず歩行者天国がある。カイザースラウテルンの中心街、ハイデルベルクのハウプト通り、リューデスハイムやザンクト・ゴアールの繁華街、ウィーンのケルトナー通り(写真)など。ベネチアに至っては街全体が車の乗り入れ禁止で毎日が歩行者天国だ。車が入らなければ人々は安心して歩け、必然的にたくさんの店が並ぶ。いろいろなイベントができるし、青空ラストランも出現する。その結果、町中が楽しい繁華街となる。日本の街作りも、車中心から脱却して考え直さなければならないかもしれない。

大学は３箇所を体験した。ハイデルベルク大学はドイツ最古の大学で、18 学部で構成され、学生数は 3 万人の巨大な大学である。とはいっても大きな建物があるわけではなく、ハイデルベルクの街全体が大学である。人文系は旧市街に、自然科学系は郊外にあるそうだ。勉強は難しく学生の 3 分の 2 は留年し、ストレートでの卒業は難しいとのこと。ただし学費が安いので、留年しても経済的負担は少ない。ゲーテやヘーゲルがこの大学に学んで、哲学は特に有名である。13 人のノーベル賞受賞者を出しており、医学部門は特に功績が大きいようである。カイザースラウテルン工科大学は情報系がすぐれた大学。校内にドイツ人工知能研究センター（DFKI）があることで知られる。12, 500 人の学生に 100 以上の学習プログラムを提供する 12 の部門から構成されている。大学は従業員 1126 人、うち教授 167 人、学術スタッフ 600 人と大きい大学である。留学生に日本人はほとんどいないが、中国人は 120 人もいるとのこと、中国人は世界中の大学に進出し脅威を感ずる。ベネチア大学 Ca’Foscari は学生数 18500 人、経済学部、外国文学部、人文学部、数理物理学部などと 19 の科学的研究センターで構成されている。ナノテクノロジーとバイオテクノロジーが有名なようである。コシック様式の宮殿を大学の校舎として使っているが、ベネチア大運河の中心部でリアルト橋とアカデミア橋の両方が見える絶好のポイントにあった。大運河には大学専用の船着き場もあった。

２．費用

①航空運賃

今回は JTB 依頼で ANA のパックを選択し、成田～フランクフルト～カイザースラウテルン～ウィーン～ベネチアの往復（フランクフルト~カイザースラウテルンの鉄道料金も含む）で 27 万円だった。KES2011 で一緒になった鈴鹿高専の川口先生は、格安航空券（19 万円？）で中華航空を使っていた。ただし台北に無理やり 1 日滞在させられるとのこと、時間の取れる場合は良いだろうが。成田～フランクフルトの直行便は早くて快適だ。

②電車、タクシー、船

ライン下りの船は片道 18 ユーロ。カイザースラウテルン～ハイデルベルクの鉄道料金は 8 ユーロ。マルコポーロ空港～ザッカリアのボートは 15 ユーロ。タクシーのウィーン中心街～ウィーン空港 30 ユーロは格安。カイザースラウテルン～大学のバス代は 1.8 ユーロだった。

③ホテル

ホテル代はウィーンが 13,000 円、カイザースラウテルンは 11,000 円、リューデスハイムは 12,000 円、フランクフルトは 8,000 円、ベネチアは高く 16,000 円。いずれもインターネットで探して、個人で予約した。カイザースラウテルンのアルカトラズ・ホテルは、学会推奨のホテルだが元刑務所で強烈な印象だった。

④食事

ドイツのビールは安くて旨い。ジョッキ一杯の生ビールが 3 ユーロで、これが美味い。これにソーセージ、ポテトをつけると最高だ。お陰で肥えてしまい帰ってから大目玉。ソーセージや生ハムをはさんだサンドイッチは大きくて安い。パスタとピザはイタリアに限らずどこにでもある。食事に困った時は世界中どこにある中華料理が良い。10 ユーロ以内で食欲のない時でもこれは食える。鮨は探せばあるが、高いし味もあやしいので勧められない。学会バンケットのドイツ料理は今一であったが、IWIN バンケットのあったフラットリア・デ・イグナシオのイタリア料理フルコースはさすがに旨かった。

３．ドイツ

ドイツは 1978 年にベルリンを訪問して以来 33 年ぶりの訪問である。その時ドイツ人は、戦友として日本に親しみも感じているように感じた。今回もそれは同じでとても親切。どこも町がきれいでキチンとし、日本人と似て勤勉であると感じた。財政問題の深刻な EU において、断トツに安定した経済で EU 全体を引っ張っているのがドイツである。

お年寄り以外であればだいたい英語が通じる。そして困っている時は誰でも助けてくれる親切心がある。治安も全く問題なく、心地よく過ごせる国だと感じた。省エネ大国であると聞いていたが、それに直接関わるようなもの、例えば太陽パネルとかは見ないで終わったことは残念。フランクフルトの高層ビルは太陽パネルで覆われているそうだが、時間的に見ることができなかった。

街を歩くと広い道には自転車のレーンがある(写真)。それは色が少し変えてあるので見てわかる。このレーンを勝手に歩いていると、自転車ドライバーに注意される。電車に乗ると自転車がどんどん乗ってくる。それだけ自転車での移動が普通であり、車を使わないエコな生活となる。これはオーストリアでも同じだったが、日本にはその気風はまだない。日本は国土がフラットではないが、もっと学ぶべきことかもしれない。

４．ウィーン

ウィーンは世界一の音楽の都だ。モーツアルト、ベートーベン、マーラー、シュトラウス、シューベルトなど音楽史を代表する音楽家を輩出した。そのウィーンのしかもあの楽友協会でコンサートを聞けたことは幸せという他は

ない。長年ニューイヤーコンサートを聞くたびに、あの演奏会場で一生に一度は聞いてみたいと思っていた。その願いが今回実現した喜びは、想像以上に大きなものであった(写真)。

もう一つはあのシェーンブルン宮殿。記念碑グロリエッテに立って、写真でよく見る、花に彩られた庭園に聳える宮殿の、あの風景が目の前にあると思うと、ほっぺたをつねって本当か確認したい気持になった。宮殿を建てた女帝マリア・テレジアの功績は大きい。

絶世の美女と言われたエリザベート王妃。その姿や生活を集めたシシィ博物館に入る機会を得て、今まで知らなかった彼女のことを知ることができた。また美術史博物館で見たフェルメールやプリューゲルは、おそらく日本でも見る機会はないだろう。

５．ベネチア

ベネチアのホテルは１泊 16,000 円と宿泊したホテルの中では断トツに高かった。学会推奨のホテル・ロイヤルサンマルコに至っては狭い部屋でも驚きの１泊５万円で、何人かの先生方が泊まられたようである。ベネチア価格といわれる高いホテル代にもかかわらず、世界中から観光客がわんさと押し掛けてくる。そのためか治安はしっかりして問題ない。住民はホテル業、土産物店、船の仕事、荷物運び、ガイドなど仕事はいくらでもありそうだ。例えば、ゴンドラで客を待つ船頭が町の至る所に客を待っている。街全体が観光地で、レストランや土産物店の数は夥しい。昔からある遺産で悠々と生活できるため、ことさらに働く必要もない。新しいものにチャレンジする気概も必要もない。この環境が近年イタリアの債権価値低下をまねき、ギリシャ、ポルトガルに次ぐ倒産国リストにあがっている理由の一端かも知れない。

ところで、ベネチア大学で発表会の間に建物がグラッと揺れた。近くの大運河を大きい船が通ったためのようである(写真)。この町は浅瀬に杭を打って家が建っているそうで、地盤が弱いのだ。それでもここは、地震や台風がないので安全でいられるようである。自然災害の多い日本では考えられない所だ。

私の発表の最中に、運河の方から突然オペラ歌手の歌声が聞こえ出した。会場の注意が削がれ、大変やりにくかった。遊覧船でのプロによる歌声のようで、聴衆はどうしてもそちらに気を取られてしまう。オーソレミオのような朗々とした声に負けてはならんと、つい私も声を張り上げてしまった。これは発表者には大変迷惑であった。

－おわり－